

かゑらじと かねて思へハ 梓弓
なき数に入る 名をぞとどむる
四條畷に散った若き武将、楠正行

楠正行通信 第27号

平成28年6月14日

発行＝四條畷楠正行の会

〒575-0021 四條畷市南野5丁目2番16号

四條畷市立教育文化センター内 072-878-0020

四條畷の合戦、その戦跡を訪ねて歩く

楠木同族会や摂楠流宗家等関係者を迎えて現地学習

私たちの会は、5月10日(火)、現地学習「四條畷の合戦、その戦跡を訪ねて歩く」を開催しました。

この日の参加は11名の会員と7名の特別参加でした。前日、東京からご参加いただいた広木、楠木同族会会員の山下、名城大学非常勤講師の久野、吟道摂楠流宗家の藤原、そして行政から、市民生活部長の西尾と産業観光課の倉永、教育文化センター指定管理者・阪奈エンタープライズ(株)社長の奥田、以上の皆様です。(敬称略)

野崎観音の展望台から深野池を想像

午前10時、JR学研都市線「野崎」駅を出発。

正平3年(1348)1月5日、本陣を置いた河内六万寺往生院から出陣した楠正行の1千騎は、巳の刻(午前10時ごろ)、野崎砦から駆け下った縣下野守率いる3200騎と最初の衝突を迎え、戦端を開き、縣下野守を負傷、敗走させます。

私たちは、野崎駅からほぼ真東にあたる野崎観音に上がり、展望台に向かいました。

河内名所図会の「四條畷合戦図」「野崎詣り」を見、また大陸と陸続きであった河内平野が、縄文海進によって河内湾に変貌し、その後、淀川・大和川のデルタ作用と偏西風によって河内潟、河内湖、そして中世、深野池と新開池を中心として河内湿原が広がっていた様子を時代ごとの地図で説明しました。

眼下に広がる河内平野は、当時、飯盛山の麓から10町(約1キロ)ほどで深野池が広がり、狭隘な地を形成していたことを想像していただきました。

中世の頃の河内平野は、深野池を中心に河内湿原が広がり、軍馬が自由に往来できませんでした。いわば、

河内湾・河内潟・河内湖と約9000年の歴史の変遷が、楠正行を四條畷の合戦の地、飯盛山と深野池に挟まれたこの狭隘な地にいざなつたといえるでしょう。

版木が伝える十念寺辺りの激戦の様子

縣下野守を破った正行は、東高野街道を北に進み、古戦田字地の残る北条2丁目辺りで、第2期の衝突を迎えます。

ここには、武田伊豆守率いる1千騎が待ち構えており、高津・高橋を大将とする大旗隊・小旗隊が飯盛山中に布陣していました。

太平記には、小旗一揆衆、長崎彦九郎ら屈強の48騎、北条神社付近の小松原より松木立を分け降り、駆け下り、山を背後に正行軍を山麓に見下ろしてその前面を遮断した、とあります。加えて、飯盛山の峰に布陣する佐々木道誉3000騎が三手にわかれて山を駆け下り、正行軍を分断のため反復襲撃を加えるに及び、大塚惟正率いる正行の後陣は破れています。

ここでの激戦を伝える文が残っていません。十念寺の本堂再建奉加帳の版木で、「貞和年中飯盛山の辺りにして戦死の靈魂、永祿年中に至るまで山野に火を立て、夜な夜な相闘毆耳に夥し・・・」と記されています。

十念寺再建にあたって、尊像を祀ったことによって亡魂が治まったことを伝え、志を募った記録です。

昭和の初め、四條畷神社参道に民家なし

私たちは、第三期の衝突を繰り返した南野辺りに向かいました。四條畷神社の参道を横切り、川崎公園に到着(写真:川崎公園で南遊紀行挿し図を示し説明)。

第三期の衝突は、南野の権現川沿いに、布陣した三



陣との衝突です。第一陣は細川讃岐守ら 5700 騎、第二陣は今川駿河守ら 7100 騎、第三陣は松田備前守ら 6100 騎、総勢 2 万騎弱でした。

この第三期の戦いで、正行が田間で兵糧食を摂ったことや第三陣の松田次郎左衛門が賢秀の長刀に倒されたこと、南次郎左衛門尉が正行の槍隊に倒されたことなどが記録に残っています。

そして、扇谷が準備した南遊紀行の挿し図、この図には東高野街道の向こうに深野池・正行墳・雁屋村が描かれています。民家は全くありません。また、昭和 28 年ころの四條畷神社参道の松並木の写真にも民家は全く見当たりません。この後行った和田賢秀墓の碑陰に刻まれた「むかし問えばススキ尾花のあらし吹く」の歌も合わせ、合戦当寺、このあたりは一面のススキを連想させてくれます。

教育文化センターで昼食タイムとなりました。

昼食の後、参加者全員から自己紹介を兼ねて正行談義に花が咲き、扇谷からは、朱舜水が残した正行像賛 148 文字を、会員の真木さんが一枚の紙に書き下ろしていただいた作品、また、教育文化センターが発行した小冊子・教文コレクションの第 1 集（平成 26 年度市民教養講座「楠正行の人間像に迫る！」A4 版・48 頁・頒布価格 500 円）を、それぞれ紹介しました。

四條畷に残る 2 か所の古戦田字地

午後はあいにくの雨模様となりましたが、いよいよ高師直を目の前にする第 4 期です。

法務局跡地から四條畷保健所にかけての一带に古戦田字地が残っています。

正行は、このあたりのどこかで、清滝川を前に本陣を構えた高師直に約半町（55 メートルほど）に迫ったとあります。

「我こそは高師直」と名乗った武将の首を獲りますが、それは上山六郎左衛門の偽首でした。せっかく挙げた高師直の首が偽首と知った時の正行の落胆ぶりが想像できます。4 万の敵と戦ってきたわずか千の正行。おそらく精根尽きた瞬間だったでしょう。

ここでも、扇谷は、準備した写真や図を指し示しながら、当時の様子を想像してもらいました。深野池に浮かぶ船と一面のススキ野原の広がる総合センターの「緞帳」（この緞帳は現在使われていません）、片山長三画集に描かれた想像図「飯盛城と深野池」、四條畷小学校の校章「菊水の紋に畷の文字」、河内名所図会の「雁塚」等です。

これらの写真や絵を見ていただきながら、江戸期には、このあたり一面に野原・湿地が広がり、雁ができ

た場所であったことを想像していただきました。また、昭和の初めころまで、大雨が降ると、舟で往来したとの記録も残っています。

四條畷高校の前では大正期の写真を 2 枚準備しましたが、大正期、正門から東を見ると、ほとんど民家のなかった様子が分かります。

そして、小楠公墓所に到着。ここでも、河内名所図会の「正行墳」を見ていただきながら、江戸期、この墓所の周辺には全く民家がなく、湿地が広がっていたことを物語る図会です。

この小楠公墓所の東辺り一带に古戦田字地が残っています。偽首に落胆しながら態勢を整えようとした正行ですが、このあたりで第 5 期の衝突を迎えました。高師兼の提案による弓を弾く作戦によって、九州の弓の名手、須々木四郎の放った矢は、正行の左右の膝頭、右の頬、左の目尻を、そして正時の眉間、喉の脇を

貫きます。（写真：小楠公墓所で記念撮影）

矢を射られた正行、正時兄弟は、これが最期と、「敵の手にかかるな」と死地を探します。

大東市に残るハラキリ字地

正行終焉の地は、ハラキリ字地の残る大東市の一角と思われま

す。かつてこの地は「御旅所」と呼ばれ、明治から昭和 20 年ころまで、四條畷神社春の大祭 4 月 5 日に、“お渡りさん” が出御し、四條畷神社を出た一行は、御旅所、小楠公墓所、和田賢秀墓、神社とまわり、この御旅所は地域の人々の心のよりどころとなり、祭神たる楠正行に親しみを感じる場所であった、と言われています。

御旅所と言われる場所は、昭和 35 年ころまでは 4 ～5 本の樹木に囲まれていましたが、その後、開発が進み、その痕跡ははっきりしていません。

なお、この正行最期の地は、権現川沿いの泥湿地域であったため、正行の供養塚は街道筋、集落地であった雁屋村に作られました。

現在の石碑は、明治 11 年に建碑されたもので、総高さ 7.5 メートルの巨石碑で、切り出し・切断に 5 カ月、竜間から 7 キロの運搬に 1 年 5 ヶ月、基礎工事は 5 メートル四方深さ 4.5 メートルに松生杭 250 本、大石 650 個、砂礫 500 駄、石灰 200 俵を使い、建碑工事に 4 ヶ月、深さ 27 ミリの石碑の書に 4 ヶ月、実に 2 年と 6 ヶ月を要したとのこと

です。その後、四條畷駅前の喫茶店で反省会をし、散会しました。現地を実際に歩くことで、歴史を身近に感じることのできる現地学習となりました。

（文責「四條畷楠正行の会」代表 扇谷昭 写真：国府良三）

